

題を「竹山に暮らして」としているが、実は竹山という住所は無い。私たちが住んでいるところは住所でいえば富ヶ岡となる。それはそれでご利益がありそうなありがたい名前なのであるが、この富ヶ岡の範囲は東西に六キロメートル以上あり、私たちが住んでいる場所をあらわすにはちよつと広すぎる。一九五二年発行の地形図には、竹山という地名が大きく書かれているが富ヶ岡という文字は見当たらない。どうやら竹山という呼び名の方が歴史がありそうである。

古い村史を見ると、富ヶ岡は昭和十年の字名地番改正によってつけられた地名で、それまでであった高台と音江別を合併したとある。そしてこの高台は文字通り地形的に高台に当り、この頂上に当る竹山十字路附近からは、遠く山々や近隣のまちを一望に見わたせることなどから、この高台の名がつけられたものとする。竹山十字路というから古くから東西南北の道が交差する高台にあったということになる。そして竹山の名称は、この辺にクマ笹が密生していたため竹山と附けられたと書かれている。クマ笹とあるが、正確にはチシマザサで別名根曲がり竹という。クマ笹とちがつて丈が三メートルになることもある大物だ。日本でいえば孟宗竹がポピュラーだが、孟宗竹が中国から持ち込まれるまではタケといえはこの根曲がり竹だったそうだ。春になると親指くらいの太さの筍が出てきて山菜として人気がある。そのため、その頃に竹山の筍を目当てに一稼ぎする人たちが大勢入り、今では立派な筍が取れる根曲がり竹は随分少なくなってしまったという。さらに昭和五十一年頃に一斉に花が咲く百年に一度とか言われる現象がおき、その後一斉に枯れてしまったとの記録もある。それでもうちの敷地の縁辺部には根曲がり竹がびっしり生えていて、そのうち東側の日当たりの良いところのものは丈も大きく、立派な太さの筍をいただくことができる。

地形的には竹山は広大な平野に舌のような形に張り出した丘陵の一番高いところに位置する。高いと言っても標高百十五メートルちよつとなのだが、他に遮るものはないので、今でもはるか遠くの山々が一望できる。春先など平地に向かつてなだらかに下る向こうに、頂きに雪が残る山々が連なる姿はいつ見ても見入ってしまう。

この丘陵の一部は原始林として国の特別天然記念物に指定されており、それ以外でも森林が多く見られる。日本植生誌によれば、この丘陵はトドマツを主とする針葉樹林で下にはチシマザサが多いとされている。広葉樹林としてはハルニレーイタヤカエデ林、ミズナラーベニイタヤ林、シナノキーイタヤカエデ林、ヤチダモ林（ハシドイーヤチダモ群集）、ハンノキ林（ハンノキーヤチダモ群集）などが見られ、多様な森林があることよって、見られる植物の数も多く、都市近郊の天然林として貴重であると書かれている。私たちのすんでいるところでも、これらの樹木はよく見ることができ、野草もいろいろな種類に出会うことができる。

